平成１９ 年（２００７年）４月２５日（水）　（第３７号）

東九州支部報

九　州　５　支　部　懇　談　会（２月３日・北九州市「九州厚生年金会館）

九州五支部懇談会報告

加藤英彦

日本山岳会の九州にある五つの支部が毎年持ち回りで実施する、五支部懇談会が、今年は北九州支部の主催で、去る二月三日（土）四日（日）の二日間にわたって北九州市小倉で行われた。東九州支部からは梅木支部長、西事務局長、加藤、飯田、中野の五名が参加した。以下その概要の報告である。

二月三日（土）

五支部懇談会の行われる、北九州市小倉北区大手町「九州厚生年金会館」へ向けて、午前一〇時過ぎに梅木支部長と二人、自家用車にて出発。一三時過ぎに到着。受付をすます。懇談会の参加者は計六二名（福岡支部七名、熊本支部五名、東九州支部五名、宮崎支部一五名、北九州支部三〇名）であった。

（一）懇談会（一五：〇〇～一七：〇〇）

①支部の現況報告

配られたレジメにそって、各支部長より報告があった。

②「公益法人化に対する各支部の取り組み」

本部から出席の平林副会長よりまず、社団法人日本山岳会の組織を、公益法人の制度改革に関する法律等改正に伴い、公益法人化する必要があり、そのための必要な対応について説明があった。

法改正により、日本山岳会を社団法人として存続させるためには、公益法人としての認可を受けなければならないが、その要件を備えるためにはもっと公益性の高い事業運営を展開しなければ

《　も　く　じ　》

九州５支部懇談会報告	1
筑豊の山々	2
佐藤正八会員を偲んで	3
大仁田山・諸塚山など	4
元猿山など	5
先達を語る①「加藤数功氏」	7
クラブ紹介③「岳童会」	8
皿内の城山	8
全国支部集会報告	9
私の無名山ガイドブック 29	9
支部定例総会開催	10
お知らせ	11
後記	12

ならない。本部としてはそのための各種の議論や検討を行っているところである。現状では、組織的に見れば会員の都市圏集中の実態や、活動内容も公益性に乏しいなど、今後あらためなければならないところが多い。会員各自が「登山文化を日本中にひろめる」と言う視点に立って、より公益性の高い活動を支部末端まで展開する必要がある。などのことについて説明があった。

①「会員の活性化対策」

各支部の会員構成が年々高齢化している現状にあり、若い人、学生などの入会を積極的に取り組み、ブロック化をはやくすすめる必要がある。一〇月三日を『登山の日』として制定しようという動きもある。新規加入促進もさることながら、脱会者対策も必要で、日本山岳会は入会の時に紹介制をとっているので、紹介者が責任を持って対応することも必要。いずれにしても、各自が意欲を持って行動して欲しいなど、活発な意見が出て、二時間にわたる有意義な懇談会であった。

(二)懇親会

（一八：〇〇～二〇：〇〇）

懇談会終了後は、記念写真の撮影があり、その後懇親会が開かれた。

出席者の中の最長老、北九州支部の吉村さんの乾杯の発声で懇親会は始まった。大先輩の元気な姿に接して、ますます元気で・・・、と思った。

各支部からの出しもので盛り上がっていき、東九州支部は最後に五人登場し、大分弁でしゃべった後で、『坊ガツル讃歌』を会場の全員で歌った。

午後八時、一次会は終了。西、飯田、中野の三名は明日予定している別の山へと向かった。二次会は別室で、一〇時過ぎまで続いた。

二月四日(日)記念山行

（平尾台・貫山）

朝食後、八時にマイクロバスで出発。私は一人自家用車で後を追った。国道三二二号を南下し、平尾台入り口より左折。吹上峠から自然観察センターへ。ここで特別に早い時間、「平尾台の自然」のビデオを約一五分間鑑賞。吹上峠にもどり、ここから登山開始。約四〇人の一行である。

吹上峠より大平山（おおひらやま）へと登りにかかる。二日前に降った雪が残っているかと期待したが、ほとんど溶けてしまって、道がぬかるんだ状態。大平山よりいったん下り、羊群原を道はつづく。「このあたりは中央分水嶺となっているところ」と説明がある。本部より指摘のあったルートと違った、正しい分水嶺を歩く。「分水嶺は線だけではなく、面のところもある」との説明もあった。（分水界というとらえかたもある）

中峠への登り、そして貫山への最後の登りも好天に恵まれ快適な登山日和であった。

（貫山山頂にて）

山頂にて昼食をとり、中とうげから茶ケ床へ下山。ここにマイクロバスが待っており、それに乗って自然観察センター駐車場へ。ここで解散して大分へと帰路につく。のんびりとした、平尾台散策の山歩きであった。

コースタイム…小倉発7:55→8:50平尾台自然観察センター（ビデオ鑑賞）→吹上峠発9:25→大平山9:40→中山峠→11:05→貫山山頂11:35→（昼食）→山頂発12:15→茶ケ床園地13:05→平尾台自然観察センター13:15→解散

豆解説

① 社団法人とは、一定の目的で構成員が結合した団体のうち、法律により法人格が認められ権利義務の主体となるものをいう。社団法人でいう社員とは出資者である構成員のこと。社団法人の具体的なものには、民法上の公益社団法人、会社法により設立される営利社団法人（株）など）、特別法によって設立される労働組合のような中間法人などがある。一般には、社団法人といえばこれらのうち、公益法人のみを指すことが多い。

② 公益法人とは、民法第34条に基づいて公益のために設立される法人の一つで、学術、技芸、慈善、祭祀、宗教その他の公益に関する社団であって、営利を目的としないものである。法人の運営にあたっては、定款を定め、社員が議決権を持つ社員総会で意思決定をし、理事が業務執行および団体の代表を行う。

③ 二〇〇六年五月、公益法人制度改革として、社団法人・財団法人のあり方を抜本的に見直すための公益法人制度改革関連3法が成立した。この法律が二〇〇八年度より全面施行される。この改正により、一般社団・財団法人法により設立された社団法人は、公益法人認定法により公益性の認定を受けなければならないこととなる。

筑豊の山々峰

（五支部懇談会の前後）

中野　稔

北九州での五支部懇談会に参加するついでに、油木ダム周辺の山々を訪れた。

大分県と福岡県の県境にある英彦山山系の北方面になる。これらの山は地元に住んでいる人々にとっては故郷の山であり、様々な夢や思い出を育んできたかけがえの無い心の安らぎを得られる場所かも知れない。特に神社や祠などの施設があるとより神聖な場所であるという実感が沸いて来るものだ。英語で言えばサンクチュアリだがこの単語は、私の場合TVのアニメ番組で学習したものだ。

どんな家でもどんな国家でも、どの地域にでもある聖域が軽視され無視されているように感じるのは小生だけだろうか。特に自然破壊の主因は、様々な工場、発電所、乗り物、なんの罪の無いようなゴルフ場も例外で無いと聞く。

もちろん家庭も参加していることに変わりは無いが、多分自覚

している人は少数派ではないかと思う。聖域に足を踏み入れる時には如何したらいいのかは、各自の心の聖域の中で判断していく事と思う。未来への提言としては、自然保護区を国土面積の九割を目標にする事。現実的には一割ぐらいか。その一割の聖域では、人口の物を作らない持ち込まない使わない。

蔵持山（472.3m）

二月三日の三時までに小倉の厚生年金会館にピットインするべく大分を午前八時に出発。

豊前から犀川をさかのぼると、野峠から北に伸びる国道四九六号の高座橋に案内板があり、壊れた鳥居が横たわっていた。

人が住まなくなって一、二年余りの民家の駐車場を無断拝借し、十時十分出発。参道は蔵持川に沿って檜林を行きやがて右折、竹林を過ぎると磨り減った石組みの坊舎の跡がある。赤い鳥居、石段を過ぎると蔵持山神社に出た辺りで単独行の登山者に出会う。

急な石段を登ると新しい上宮に出る。案内板に従って屏風岩からの展望を満喫。県境の山々が待ち受けている。鞍部に戻り北の山頂に出ると四等三角点が小さく蹲り、行橋市街と周防灘が見られるが木々が周囲を囲っている。十二時二十分到着。

（蔵持山にて）

大阪山（573.0m）

次に大阪山を目指す。国道二〇一号線の新仲哀トンネル西出口辺りから南へ登ると呉ダムがお出迎え、山頂直下まで車道が延びてい

佐藤正八会員を偲んで

支部長　梅木　秀徳

佐藤正八会員が日本山岳会に入会したのは、一九九二年の秋である。高等学校登山研究会に所属し、海外での登山を含め、その活動は既に広く知られてただけに、彼の入会を会員みんなが心から歓迎した。

新聞社にいた私が初めて彼を知ったのは、彼がイタリアに留学中の時であった。文化部にあてにイタリアからの通信を定期的に送ってもらい、それを紙面に掲載したのがはじまりで、まだ面識のない彼の文章力には感心させられたのである。彫刻が専門で、留学も芸術のためと分ったが、通信の内容は彫刻芸術に限られたものではなく、イタリア人の気質を初め、その生活、さらには社会の有様を的確に捉えており、誠に面白いものであった。

一九六〇年代から登山を始め、県内や九州の山だけでなく、日本アルプスなどでの経験を積んでいたのは後で知ったが、スイスでは七七年のマッターホルン、アイガーを皮切りに、三度にわたり登ったと聞く。とりわけマッターホルンにはご執心の様子であった。

帰国してはじめて直接会い、その後大分県山岳連盟での活動を通じて、彼の山の経験の深さを知った。そして、山岳連盟が八五年に中国へ第二次のチベット・ヒマラヤ登山隊を派遣することになり、私が踏査隊の責任者となったためさっそく彼を誘った。

東チベット、特にヤルツァンボ川の大湾曲部は、それまで外国人の立ち入りが規制されていたところで、我々は何と六十年ぶりに訪れた外国人として迎えられた。その報告書の中で彼は「チベットの人々は、生活も厳しく、物も極めて少ない中で、後の世への祈りと願いを、美の造形として残し伝えようとする情熱を持っている。豊かさとは何なのか。チベットの人の表情には、一人として貧しさが見えない。その精神の限り無い深さに圧倒された」と述べ、芸術家としての彼の持つ感性の豊かさをかいま見ることができる。

その後、登山やスキーに何度も同行し、日本山岳会にも入会した。そして、私とともに行く二度目の海外登山が中国のシルクロードの山、党河南山であった。彼は登山隊の先発隊として精力的に動き、二十日間に近い全日程の記録を丹念にまとめ、さらに重いカメラで数百枚にのぼる写真を撮影した。そして自ら初登頂を果たし、大分県の旗を頂上にかざした。ちなみに、この時隊員たちが着用したTシャツは彼のデザインによるものだ。

東九州支部の活動も熱心、役員として青少年部門を担当したほか、会報のデザイン、あるいは各種会合での会場構成を買って出るなど、小柄ながら、髭をたくわえた精悍な感じの彼の姿は、いろいろな場面で、会員みんなの目に焼き付いていると思う。

彼と共にした最後の山は、昨年秋の韓国山岳会蔚山支部との交流登山であった。その際、彼は久住山から大船山へと韓国の登山家たちを案内してくれた姿がまぶたに浮かぶ。

彼はその透徹した芸術家のまなざしで、今も山々と私たちを見守り、風となって山々をさすらい、緑や紅葉、雪や氷に親しみ、酒を飲みながら語らい合っていることだろう。

るので楽勝かと思いきや、山頂付近の車道には雪と、進入禁止のゲートが歓迎してくれたのだ。十三時出発。駐車場のタイヤの跡は無かったが、途中で下山者グループに遭遇。二等三角点の出迎える山頂では、見かけた様な青年に出会いシャッターを押してもらった。

2004.11　日本山岳会　福岡支部

日本分水嶺踏査という表札が木に掛けられている写真がホームページに載っていた。その中に一歳十ヶ月を筆頭に可愛いお孫さんたちが小さな杖を就いて登っている写真も載ってる。十三時三十分一路厚生年金会館へ。

犢牛岳山(こうといだけ)(690.6m)

本部から来た副会長の挨拶を聞き公益法人の在り方を認識させられる事に成った。

そして、その晩は宴会場から出てきた二人と一緒に、油木ダムに架かる橋のたもとの駐車場にテントを張り、私は加藤さんから貰ったお弁当を美味しく頂いたね。

二月四日朝五時半頃から、野営している駐車場に次々と車が来るようになった。まだ外は真っ暗。聞いてみるとダム湖に掛かる橋の欄干から釣り糸を垂れ魚（ワカサギ）をゲットするとの事。お魚にとっては釣られた方が好いのか、天寿を全うした方が好いのか、如何なものか。

犢牛岳六九〇．六メートルを目指して登山口である田代の集落に七時五十分頃着く。犢牛山の東の集落である平山地区からは、山頂から南東に延びる尾根の鞍部まで車道がのびていた。（もちろん車両通行止め）その一角に登山の案内標識と電波塔が待ち受けていたが、立派なアスファルトの車道に比べ集落に住む民家の荒廃ぶりは現代文明の光と影を象徴しているように感じられる。

田舎でも都会でも富み栄える地区と衰退してゆく地区とより鮮明になってゆく事だろう。人が住まなくなった家屋を見ているとそんな感傷に浸ってしまった。

所要時間は鞍部まで二十分余り、此処から山頂まで三十分、帰りは三十分余りである。山頂部には二つのピークがあり、二、三日前の雪が残っている。

奥の二等三角点のある山頂は自然林に囲まれ展望はなく、手前のピークの方が其れなりに展望が得られ、感じの良い所であった。

日岳(589.4m))

次に登った山は五八九メートルで、一泊させて貰った油木ダムの南二キロ位に三角錐の雄姿を見せていた。英彦山連峰から見れば、北の方角にあたるところ。一見何の変哲もない山やダムも、かけがえの無い大切な存在で、心して生活している人は何人ぐらいいる事か。

登山口は山の西側にある無田と言うところの、新しい墓の様なものがある一角から延びる里道である。峠までは沢沿いの静かな植林の中で、峠の鞍部からは急登の連続で、登るほどに自然林が多くなって来た。

（日岳山頂にて）

三等三角点のある山頂部には、立派な祠があり、近隣の集落の人々が沢山の感謝と祈りを捧げた姿がまぶたに浮かぶようである。行きは五十分、帰りは四十分。山頂で昼食をとり下山した。

戸城山(317.6m)

最後に登った山は、油木ダムの北、前日登った大阪山の南で標高三一八メートルの戸城山。戸城山森林公園と駐車場や案内板など整備されており、行政の並々ならぬ配慮と心配りのお世話になり、植林の中を楽々と山頂に立たせていただいた。

山頂部は、街中の公園と見紛うばかりに整備され、木製の娯楽施設が空しく子供達の歓声を待ちわびている様に感じられた。山頂の展望台からは大阪山などほぼ三六〇度見渡せ、山城が在った戦国時代を彷彿させられる。行き二一分、帰り一八分である。

大分へは、広域農道にて椎田ＩＣまで快適に走り、『豊前おこしかけ』と言う道の駅にて小休止。

（戸城山登り口）

参加者…西、飯田、中野

大仁田山、諸塚山など

未（ひつじ）にちなんだ山旅

（二月月例山行報告）

牧野伸江

二月一〇日（土）、午後五時サニー出発。飯田車、中野車、に五人が分乗。竹田のマルショクで食糧を買いこむ。熊本県の波野から高森町、蘇陽町を経て宮崎県の五ヶ瀬町から六峰街道に入る。

よく整備された林道をどんどん上っていく。途中車の前を大きなイノシシが横切る。林道に入って約二〇分で、道脇に広場を見つけ、そこを今夜の野営地とする。時計は午後九時過ぎ、澄んだ夜空の星がきれい、気温は〇度ぐらい？寒い。風が強くて時折り雪が舞う。

西さんのテントを張り、中で石川さんの持参の猪肉鍋をつくり、五人がかこむ。肉が軟らかく、身体が暖まっておいしかった。一二時就寝。

翌日も好天に恵まれる。今日最初の山、二上山登山口はすぐ近くだった。七時半に登り始める。途中の道は二上山神社の参道で、鉄の階段などがあり、りっぱな社のあるところは展望がよく、山岳信仰の山と案内板に書いてある。

神社から細い急な道を一五分ほ

どで落葉樹の中の狭い山頂についた。すぐに下山し、八時半には登山口に着いた。

（二上神社）

次の今回の主目的の山「大仁田山」へは、そのまま六峰街道を行けば稜線伝いだが、崩壊で林道は通行止め。いったん内の口という集落を経て国道に下り、飯千峠へと上る。

峠の少し先から「大仁田スカイライン」と名付けられた林道をどんどん上っていくと、林道開通記念碑のある広場に着いた。そこが登山口で、九時二〇分に登りはじめて三〇分には山頂に着いた。

一三三五，六m、大仁田山、今月の干支にちなんだ山は一〇分の登りだった。頂上には山の名前を刻んだりっぱな石碑がある。展望はない。

（大仁田山にて）

それから赤土岸山に向かう。一〇時五分より登りはじめて一〇時二二分に山頂に着いた。頂上は木立が伐られて明るい日だまりで暖かかった。

次に諸塚山に向かった。鳥居のある登山口に一〇時五五分に着いた。この山は英彦山、霧島の高千穂ノ峰と共に有名な修験道場であり、天孫降臨の地ともいわれていたと、案内板に書いてある。

鳥居をくぐり、コンクリートの疑木丸太を横に並べた階段を上っていく。

霜がおり、サクッ、サクッとした踏み心地。木々の霧氷が風に吹かれて落ち、地面をうっすらと被っているのが、まるで雪が積もったような印象を受ける。

（諸塚山登山口）

よく手入れされた道は幅も広くて歩きやすい。一一時四〇分、一三四一，六m、諸塚山山頂に到着。展望は北から東にかけてがよい。遠くの山々が見える。ここでゆっくり昼食をとり、三角点でバンザイとキャッホーを叫んだ。一二時一五分に下り始めて、一三時には下山。

帰路は高千穂経由となる。六峰街道から下っていくと、水の口の神社のところでカツラの巨木を見て、高千穂に出る。ここでシソの千枚漬けを売っているところをさがして買い、あとは祖母山麓の五カ所高原を通り、竹田を通って帰った。

今回の山行は舗装された林道ばかりで、飯田さんのおかげで道に迷うこともなく、天気にも恵まれたおだやかな一日だった。

参加者…飯田、石川、中野、西、牧野

※　干支にちなんだ山の中で、未（ひつじ）にちなんだ山をさがすのは、全国でも至難なことである。ズバリその名が使われているのは北海道の後方羊蹄山ぐらいであろう。県内で未（羊）にちなんだ山をさがしたが見つからずに、近県の山もあさってみたが、やっぱりなかなか見つからない。そこで無理にこじつけて『洋』のつく山をさがす。これもけっこう難しい。大仁田山が、天気のよい時には山頂から日向灘が見えるということから別名「望洋台」の別名があることを聞き、このたびの干支にちなんだ山旅となった。

（K・I）

元猿山など

申（さる）にちなんだ山旅

（二月月例山行報告）

岐部威吉

洗面器の冷水で顔をはたき、一気に眠気をふっとばした。庭に出て空を見あげる。どんよりと曇っている。天気は期待できそうにないなあ・・・。

旅支度をととのえ（少し大げさか）、白ツバキを横目に見ながら門扉をしめる。さあ、出発だ。

自宅を五時四〇分に出て、サニーに五時四〇分に着く。同行の中野氏がすでに姿を見せていた。雑談していると主人公の西さんが登場。いつもの笑顔で安心した。風邪も素通りしたのかな？そして飯田、安部両氏、続いて牧野、今山両女史があでやかに登場。私は牧野女史と飯田氏の車に乗り込む。

安部氏の先導で１０号線から近道を通っていく。戸次から吉野梅園を通って野津に出る。この近道は知らなかった。

竜王山（198.7m）

八時前に蒲江に着く。飯田氏の提案で、最初に屋形島の竜王山に登ることになった。船は八時一五分発。船に乗るのはひさしぶりだ。三月の海風は思ったよりさわやかだ。舟は一〇分弱で島に着いた。

港から一〇〇ｍほどいくと砂浜の前に家々が点在する集落がある。

集会場のまえで出会った人に竜王山の登り道を尋ねると、親切にその入り口まで案内してくれた。

荒れ果てた登山道の、雑木林の坂を登るうちに汗ばんできた。小休止してみんながジャケットを脱ぐ。気がつくとマムシ草が足下にあちこち・・。まるで数匹のマムシに狙われているようで、いささか不気味だ。

マムシを踏みつけながら登っていく。道はほとんど分からないので、先頭が帰りの目印を付けながら進む。直径三メートルほどの大きな穴ぼこを発見。「何のために・・・・？」と不思議に思う。

（後記説明）

登り初めて約五〇分でピークに着く。（頂上の東の肩）ここを右折して数分で、なんだか周辺が明るくなったと思ったら、頂上みたいで納得した（九時三〇分）。

ここからの眺めだと、南に比べて北は雑木に覆われて見通しが悪い。三等三角点で今西先生流のバンザイとヤッホー。帰りの船がくる（一二時四五分）まで時間があるし、山頂は長居するような場所でもないし、下山して集落の奥にある神社に参拝でもしようということになる。

一〇時四〇分に集落に下山し、最奥の神社に向かう。民家の間の細い路地をいくと、一人の老婆と出会う。闖入者として、僕らの方からあいさつすると、話し好きなおばあちゃんはいろいろと話してくれた。畑には、ほうれん草、大根、ウコン、イチゴなど栽培していること、先記の穴ぼこは、昔山の頂上近くまで耕していた頃の、水飲みのための貯水池だったこと、屋形島は漁師でみんな元気が良くて、蒲江町の運動会は小さな島が何時も優勝していたことなど・・。

神社に着くと、鳥居には厳島神社、昭和八年建立と刻んであった。帰宅して調べると、市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命をまつる。海の神で竜王の娘とのこと。推古天皇の創建で千氏一門の崇敬をえて現在に至るとある。それで竜王山かと納得する。

神社を後にして砂浜に出ると昼に近い。防波堤を風よけにして昼飯の輪をつくる。弁当をひろげながら空を見あげると、とんびがぐるぐると旋回している。時間がゆっくりと流れていく感じである。出かけに心配していた空模様はすっかり快晴。いきつけの喫茶店の花好きのママの顔がうかんだ。ママにお土産を持って帰る約束をした。食事をしながら周りを見ると、大根の白い花が風にゆれている。携帯でたしかめると当人が出て、あまり気がすすまないみたいなのでやめる。

ものはついでで、足下に転がっている石ころを記念品とすることにした。（この選択肢は成功で、その後茶店のドアのストッパーにおおいに役立っている）

（竜王山山頂にて）

元猿山（270．0m）

一二時四五分の船が来て、蒲江に戻ると一路元猿山へ。一二支の山の、今月は『申』ちなんだ、今日の主役の山だ。標高は二七〇ｍだが、海抜０ｍからだからまあ、高崎山ぐらいの山と思う。

登山道の入り口ふきんには約一〇基ほどの立派な墓があり、中のいくつかは、墓石が基礎の上に横だおしになっている。故意にそうしているのか、たおれたのかわからない。

小さな鞍部に着くと、そこから右に折れて本格的登りだ。左下に太平洋の波音を聞きながら、急な斜面を登っていく。ここも道らしい道はなく、目印のテープがあるだけだ。峠から約四〇分ぐらいで山頂にたどりついて、汗をふいた。

（元猿山山頂にて）
三等三角点のある山頂は深い木立の中で、視界は全くなかった。

背平山（391．8m）

今日の山の中で一番高いこの山は、頂上直下まで車道がある。一気に頂上の下の駐車場まで行き、そこから歩いて三～四分できれいに整備された頂上に着く。テレビの電波中継施設があり、展望は最高である。蒲江、宮崎県境のリアス式海岸が一望。今朝船で渡った屋形島がぽっかりと海に浮かんでいる。

伝承によると、安政年間に数回にわたり地震があり、そのおりに背平山が崩れて、この大地が生じ、地勢が変化して漁業ができなかったという。（大地というのは高山海岸にある二つの潟湖をさすものと思われる）

ここでしばらく展望を楽しみ、今日三回目の今西流バンザイとヤッホーの儀式をして、一路大分へ。疲労困憊、爆睡。

参加者…安部、飯田、今山、岐部、中野、西。牧野

（背平山山頂から見た屋形島）

サクラソウ

シリーズ 支部の先達を語る①

新たなシリーズものとして、我が日本山岳会東九州支部の歴史を築いてこられ、故人となられた先輩の方々、おおよそ一〇人について紹介することにした。

先達の功績や思い出話し、あるいは人となりについて、なじみの深い会員から語って頂く。

その第一回は加藤数功氏を、梅木支部長に語って頂いた。

加藤数功氏（一九〇二～一九六九）

梅木秀徳

加藤さんは、九州における類まれな登山人であり、指導者であり東九州支部の恩人だった。

昭和初期から四十年間にわたって、常に九州のパイオニアであり、登山人たちの中心的存在であり続けた。同時に山を主体とする観光、あるいは自然保護、また山村民族の研究でも先駆者だった。

明治三五年、北九州市に生まれ、中学生の時から山に登っていた。慶応大学の山岳部で本格的な訓練を受け、卒業して帰郷するとともに昭和三年に筑紫山岳会、五年に九州山岳連盟を設立、七年に日本山岳会に入会（会員番号一三七五）する。

以来、精力的な活動を始めた。その足跡は九州全域から南の島にまで及び、そのほとんどがパイオニアワークだった。

例えば、祖母・傾山群だけを取ってみても、昭和三年からわずか六、七年の間に十九にのぼる初登はんや初縦走を記録している。まさに九州でのスポーツ登山の草分けであり、基礎を築いた人だったと言えよう。

九州の山のなかで、加藤さんが最も愛したのは九重山群だった。大学を出て九州採炭KK、石丸鉱業KKに勤めて安定した仕事をしていたが、それを投げ捨てて昭和十八年に九重山硫黄鉱業所の所長として飯田高原に住み着いたのも、九重を愛するが故だった。

戦後は直ちに山岳会を復興させる。二十一年に九州山岳連盟を再立ち上げし、二十三年には大分県山岳連盟会長、二十八年には九州山岳連盟の代表ともなった。

また二十五年に大分県嘱託となってからは県文化財専門委員などとして自然公園問題、自然保護に取り組み、九州山岳保護協会の会長に就任した。

昭和三十年ごろから始まった日本山岳会大分支部（現・東九州支部）設立の動きにも積極的に参画し、三十五年八月五日、支部が誕生すると顧問につく。

この前後から海外の山にも目を向け始め、大分ヒマラヤ研究会を組織して具体的な計画を練り始めたが、当時はネパールが鎖国状態で思うにまかせない。

そのうちヒンドゥクシュ登山の話が生まれ、東九州支部を中心に大分ヒマラヤ委員会が発足して、野口秋人さんとともに代表になり、四十年のコー・イ・モンディ登頂を成功させた。

どこから見ても温厚そのものの紳士でダンディー。しかし、山に関することとなるとわき目も振らずに前に進み、安易な妥協はしないという強い一面を持っていた。

このため時として誤解されることもあったが、その登山人としての魅力によって、加藤さんの周りにはいつしかグループが生まれていた。

著書も多い。九州で初のガイドブックである「九州登山案内」と、それに続く写真集「九州山岳大観」は、名著として知られるが、ほかに執筆・編集した山岳書は十指を越える。

昭和四十四年秋、死去された。息を引き取る五時間前、最後の気力を振りしぼって「九重山」と書いたのが絶筆。

高峰宋釈一貫居士。自ら常に高峰であり続け、生涯を一貫して山に捧げた加藤さんだった。

（昭和四一年すがもり越にて・遺稿集より）

（遺稿集「九重山」）

（「九州山岳・第一号」昭和十一年十月十五日明文堂発行・A五版三四一頁）

「九州山岳・第一号」より

四三頁「屋久島の山岳」

六八頁「祖母山より傾山まで」

一五四頁「九重山」

会員所属の山のクラブの紹介コーナー　（No.３）

「大分岳童会」

徳　永　昌　弘

昭和５６年、梅木秀徳さんの指導のもとに、大分交通観光社が中高年層を対象に、毎月一回「健康づくりハイキング」のバスツアーを計画した。当時はこうした企画はめずらしく、第一回には「男池から風穴・黒岳」を実施したところ８０名の応募があり、大成功であった。その後、毎月県内近郊の山々を歩き、そのうちに福岡、宮崎、熊本と遠征し、当時としては大人気であった。

こうした中、少し実力がつくとものの足りなくなり、雄志数名が独自の山の会をつくろうと、梅木リーダーの指導のもとに昭和６２年に「大分岳童会」が発足した。

名　称…大分岳童会
創　立…昭和６２年４月
会　員…創立時＝糸永博吉ほか４７名
　　現　在＝１３６名（平成１９年４月１日現在）
代表者…
会事務所…大分市金池町「大分交通観光社内」
理　念…「自然に親しみ、自然を愛し、自然に学んで、自然を守る」

あゆみ

○　今年で発足２０年を迎えるが、発足と同時に表銀座の槍ヶ岳からはじまり、県外の有名な山にどしどし挑戦した。

○　これまでに登った「日本百名山」は次の通り。

北海道地区＝利尻山、羅臼岳、斜里岳、阿寒岳、大雪山
東北地区＝岩木山、八甲田山、八幡平、岩手山、早池峰山、鳥海山、月山
北関東地域＝燧ヶ岳、至仏山
上信越地区＝谷川岳
北アルプス地区＝白馬岳、鹿島槍ヶ岳、剣岳、立山、槍ヶ岳、穂高岳、常念岳、焼岳
中央アルプス地区＝八ヶ岳、御嶽山、木曽駒ヶ岳、空木岳
南アルプス地区＝甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、北岳、間ノ岳
西日本地区＝白山、伊吹山、大峰山、大山、剣山、石鎚山
九州地区＝九重山、祖母山、阿蘇山、霧島山、開聞岳

○　海外遠征もこの２０年間にずいぶん歩いた。（平均参加者は２７名）韓国を手始めに、ニュージーランド、スイス（創立１０周年記念）、カナダなど。

○　また、山行きだけではなく、専門の講師を招き、最低の知識としてのインドア講習会も開催した。気象知識、地図の読み方、救急処置など・・・・。　事実傾山、尾瀬では骨折者が出て、渡部リーダーが応急　処置をして帰ったこともある。

今年、発足２０周年記念行事を九重地区で開催する。これまで多くの会員が登録していたが、体調、そ後何らかの事情で退会された元会員にも参加を呼びかけて、これまでの大分岳童会体験、今後のあり方などについて語り合いたいと思う。

皿内の城山

（五三五，八m）

安部可人

昨年一〇月二九日、登頂の中野さんからＧＰＳマップをもらっている。会報一四年七月号の飯田さんの無名山ガイドブックもポケットにある。

地図「中津留」を見て数軒の過疎の家がある西山の皿内に着き、鳥居の東三〇〇ｍ、等高線三〇〇の林道の取り付き点、八時五〇分通過。すぐに岩稜にぶちあたる。用心のために引き返し、南へ二〇〇ｍぐらいまわりこみ、テープはないが適当に下から見える稜線に向かって岩場をクリア。四七〇ｍピーク到着。

ミツバツツジが点々と、傾山、新百姓山、向こうに大崩の台地、素晴らしい稜線あるき十数分でコルへ。第二の岩壁に当たる。指示どおりに左へ、テープもあり、難なく再び稜線へ。また一〇分ぐらいいくと、ちょうど八丁越から大障子を見たようなおそろしい岩壁がそそり立っている。中野ＧＰＳ記録はこれを左からクリアしているが・・・・、すごい技術と若さ。

ガイド通りにコルから右へ少し下り、大陸飛来のフーセン発見。テープが消えて不安。南側をまいて不気味な照葉樹林の中を、紙テープをつけながら（あとで回収）

トラバース。一〇分ほどいくと、岩の間からあがれそうなので近づき、七㎜、一〇ｍの新ザイルを出したが、落ちそうで中止。下山しようかと弱気の虫。ガイドの地図を読み直して、納得。ＯＫ、元の地点にもどり、さらに一〇分ぐらいいくと地図上左上に三角点、右にコブの間にある暗いコル（左は絶壁）についた。ちょっと下がって左にとりつくと、すぐ三角点の真下。あの絶壁の上について、西へ数分、頂上稜線は見えているからルートをさがす。五、六ｍの岩場があり、再びザイルを出す。ザックとストックはデポ。軽くさわっただけで落石（おそろしい、やめようか）。上の木株にザイルを投げて通し、ダブルで使用すること二度。足場の先の石が動くのは分かっているが、命がけ、しかたなし。また落石。独りだからおそろしい、いや独りでよかった。

七〇歳、腹は出て、からだが動かないが、あと三ｍ、慎重に、用心ぶかく、ナタで足場を掘る。ちょうどよい握る木があった。

稜線に着いてからは東へ二〇ｍで三等三角点。一二時二〇分着。東の柏山、一つ戸がちかい。早々に下山。今月三回目の山行は、入山者の気配のない淋しい静かな名山、城山。久しぶりに興奮し眠れず・・・。

（Ｈ１９・３・１２）

全国支部集会

西　孝子

福井支部行事で永平寺とあり、まだ行ったことがないので胸をときめかせて参加。一〇月六日、大分発フェリーで神戸へ、そして福井から永平寺へ。信仰を高めるための研修である。

日程一日目、七日午後五時入浴。まず案内の僧より廊下の歩き方を教わる。両手を衣の前で組み、音を立てずに無言で歩くこと。午後七時半に夕食。膳の前に正座。祈りの言葉。箸入れの袋にこう書いてある。「五観の渇一切の多少を計り、彼来所を量る。二己れが徳行の全缺をはかって供に応ず。三心を防ぎ過を離るることは、貧等（とんとう）を宗とす。四将に良薬を事とするは、形枯を療せんがためなり。五成道のための故に、いまこの食を受く」とあり。

音をたてずに静かに、まさに一汁一菜である。もち菓子がついていたが、これはお客なので特別であろう。最後に茶で器を洗うようにして飲む。「願わくばこの功徳をもって・・・・」ごちそうさま・・・・。

八時半座禅、法話、映画は寺での修行と寺内案内説明であった。九時開枕。（消灯）

翌朝午前三時二〇分起床、洗面、三時五〇分法話、五時読経、声の美しいこと。

終わって寺内めぐり。七時朝食、下山。わずかな時間ではあったが、修行僧の姿をかいま見る事ができ、人生の過ごし方を考えさせられた一しゅんであった。

大佛寺山（八百七米）へ登り、深山幽谷の地に大小七〇余りの建物を見下ろす。七堂伽藍、なかでも傘松閣は一九九四年の改築で、絵天井の大広間の絵は、昭和五年当時の画家一四四名による二三〇枚の花や鳥を中心に描かれた、美しい色彩画は一番心に残るところであった。

（傘松閣の絵天井）

記念に大本山永平寺と印した茶ぬりの箸（自分が食事に使用したもの）をいただく。

静々と寺を去る。後は芦原温泉「美松」へ。八日夜は昨夜の『静』のストレスを破り、大さわぎ。地元の有志、お若い婦人？五人のフラメンコを見て、アンコール。

九日は滝谷寺→東尋坊→芦原温泉駅→神戸→フェリー→大分へ。一〇日六時に我が家へ。　行きの船の中では佐藤正八さんがたおれるという、思いもよらぬアクシデントがあったり、寺では正座ができず、皆と一緒に立てずにころぶ恥ずかしさなどあった。

費用は交通費と二八，〇〇〇円也

（昨年の全国支部集会）

私の無名山ガイドブック29

囲峠から「新百姓山へ」

（その２）

飯田勝之

前回は木浦から囲峠に登るルートを紹介したが、今回は藤河内からのルートを紹介しよう。と言っても、このルートは稜線まで車で上ることができるのである。渓谷のキャンプ場の脇の林道を下り、渓谷に架かる橋を渡って林道をどんどん上ると、広大な伐採地の谷を通過し、大きく迂回しながら高度を上げて、やがて谷から２０分ほどで新百姓山と天神原山とを結ぶ釣り尾根のオープンカット部分に達する。

ここは旧峠の鞍部から三〇〇ｍほど東に寄ったところだ。掘り割

りの北側には天神原山へ稜線の登り口があり、反対の南側手前に稜線へとりつく小さな道がある。ここからすぐ上が稜線で、灌木の中を西に進むが、これより先は新百姓山の山頂まで、明確な登山道はない。わずかな踏み跡や伐り分けなどを頼りに、地図とコンパスをよりどころにルート確認が必要となる。

（新百姓山への稜線の登り口）

少し進むと地図上の９１１㍍の標高点を通過し、緩いアップダウンで高度を下げて、８６０㍍の囲峠の鞍部に達する。植林後三〇年ほどのヒノキに被われた、広い平らな鞍部は薄暗い小広場で、峠道の面影は何処にもない。

ここから緩く登った後、少し急な下りで小鞍部を通過し、そこからいきなり本格的な登りとなる。スギの植林地の中、右に左に風倒木や間伐後の倒木を避けながら、急斜面をジグザグに登っていく。三〇分ほどの急登で傾斜が緩くなり、やがってカシやシイ、タブなどの天然林に変わり、稜線も平らになる。標高１０００㍍のあたりだ。

少し平坦が続いた後、再び傾斜が急になると稜線に大きな露岩が目立つようになり、岩を巻いたり登ったりしながらの登りとなる。そして、三〇分ほどで小ピークを感じさせるような稜線の肩に登りつく。

ここからやや左（西）に向きをかえて、少し傾斜が緩くなる。このあたり、下りには方向を間違え、支稜に迷い込みやすいところだ。

緩やかな登りを行くと、木々の間から左手に桑原山、木山内岳、夏木山などが見えてくる。地図上の１０５１㍍の標高点のあたりだ。さらに登っていくと、それまでの照葉樹と落葉樹の混交林から、リョウブやシデやカエデなどの落葉樹林となり、さらにヒメシャラやナツツバキなどにブナ、トガなどが混じりはじめて、素晴らしい天然林の林相が、登る苦労を忘れさせてくれる。

この稜線は数年前までは、標高１０００㍍を越すとスズタケが密集するところであったが、何故か今はその面影すらない。路地と落ちち葉の上をいく、すこぶる歩きやすい稜線となっている。

たえず左手に見え隠れしていた、桑原山や夏木山に続く稜線が、次第にさほど高さを感じさせなくなってくる。稜線の左手に大きな路岩があり、この上に上がると、眼下に藤河内の谷が広がり、夏木山、木山内岳、桑原山に連なる稜線のアップダウン、その背後には大崩山の巨大な鈍頂や、小積ダキなども見ることができる。

（桑原、木山内と背後の大崩山）

やがて稜線が判然としなくなり、だだっ広い山腹のわずかな獣道の踏み後を、まっすぐ登るようになり、旧峠からおよそ二時間半ほどで山頂とおぼしきピークに登りつく。しかし、新百姓山の山頂はまだその少し先だ。

ここでほぼ直角に左にとり、緩やかに右に迂回するように稜線をたどると、緩い登りをピークから三、四分で、三等三角点の待つ静かな山頂に達する。

かっては猛烈なスズタケにかこまれた中の、小さな空間でしかなかったこの山頂の一画は、今は広い樹間の広場で、すっきりと遠くまで見とおすことができる。

このため、素晴らしい原生林の林相や、山頂の開放感、清涼感を味わうことができるが、往年の新百姓山のイメージがなくなり、何となく『らしさ』にかけると感じるのは私だけだろうか。

コースタイム（参考）…掘割り→0:15→旧囲峠→0:30→コンター一〇〇〇㍍→0:30→一〇五一㍍標高点→1:00→露岩の展望台→0:30→新百姓山

地図…二五〇〇〇分の一（木浦鉱山）

平成一九年度 支部定例総会開催

平成十九年度（二〇〇七年度）日本山岳会東九州支部の定例総会が、去る四月十六日（土）午後六時より、大分市「コンパルホール・視聴覚室」において開催された。

この総会は、支部会員、会友出席三六名（別に委任状五三名）で成立した。

総会はまず議長として、蓮谷会員が選出され、続いて梅木支部長が開会にあたり「日本山岳会は公益法人化に向けて、会の活動や運営のあり方について大いに改善が迫られている。支部においても、これまですすめてきた青少年体験登山をはじめ、山の清掃、植林、自然保護活動など、今後、公益的活動をどのように展開していくのか、協議しながらすすめる必要がある。また、今年は韓国山岳会蔚山支部との交流を始め、各種の活動が予定されており、支部員が一致協力して取り組むようにお願いしたい」とあいさつがあった。

その後、議事に入り、①二〇〇六年度事業報告②二〇〇六年度会計決算報告、③会計監査報告がなされ、報告通りに承認された。

この後、④二〇〇七年度事業計画（案）⑤二〇〇七年度予算計画（案）が提案された。事業計画の

中では、五月二日から蔚山における韓国山岳会蔚山支部との交流登山の実施、七月二二日の第五回青少年体験登山大会や九重山系自然保護活動など、一年間の活動計画が提案された。

また、今年度の支部月例山行では「県内と近県の『富士』にちなんだ山に登ろう」をテーマに年間の山行計画の提案があり、今年も暮れには重廣会員との忘年登山の実施や、今年喜寿を迎える会員のお祝い登山の実施なども予定していることなど・・・・。これらが原案通りに決定された。

また予算案も提案通りに承認された。このなかでは、支部費の納入率が低い見通しの予算となっていることに関して質問があり、年間の必要経費を見通した上で、過去の入金率を考慮したものとの説明があった。やむを得ないことであるが、本来予算は全員納入を前提とすべきこと、そのためには会員が支部費の完納につとめる必要があるなどの意見が出された。

さらに今年は支部規約の上で、二年に一回の役員改選の年で、総会で選出することになっているが、この日の総会では現梅木支部長の留任が決まり、他の役員は後日支部長が指名して決められることとなった。

総会終了後は、アトラクションとして、西孝子会員による「マナスル五〇周年報告とネパールの旅」と題して、ネパールの山行やトレッキングについて、スライドを使って体験講演がなされた。

（文責　飯田）

一九年度月例山行予定
テーマ「県内と近県の富士に登ろう」

◎五月二七日（日）　由布岳（ゆふだけ）（豊後富士・ぶんごふじ）1,584.0 m（別府市・由布市）

◎六月一七日（日）　涌蓋山（わいたさん）（玖珠富士・くすふじ、小国富士・おぐにふじ）1,500.0 m（九重町・熊本県小国町）

◎七月八日（日）　琴路岳（ことじだけ）（能古見富士・のごみふじ）501.2 m（佐賀県　鹿島市）

◎八月二六日（日）　月出山岳（かんとうだけ）（日田富士・ひたふじ）709.0 m（日田市）

◎九月九日（日）　矢筈岳（やはずがだけ）（姫島富士・ひめしまふじ）267.0 m（姫島村）

◎一〇月一四日（日）赤星山（あかぼしやま）（伊予小富士・いよこふじ）1453m（愛媛県伊予三島市・土居町）

◎一一月一八日（日）　熊ヶ岳（くまがたけ）（来浦富士・くのうらふじ）527.0 m（国東市）

◎一二月九日（日）　花尾山（はなおさん）（渋木富士・しぶきふじ）669m（山口県長門市・秋芳町、一位ガ岳（いちいがたけ）（長州富士・ちょうしゅうふじ）（豊田富士・とよたふじ）672m（山口県長門市・豊田町）

◎一月二〇日（日）　胡麻柄岳（ごまがらだけ）（津久見富士・つくみふじ）716.3m（津久見市）

◎二月一七日（日）　震岳（ゆるぎだけ）（鹿本富士・かもとふじ）（肥後小富士・ひごこふじ）416.3m（熊本県・山鹿市）、高畑山（たかはたやま）（河原富士・かわはらふじ）肥後の小富士・ひごのこふじ）795.6m（熊本県・西原村）

◎三月九日（日）　小富士山（こふじさん）（小富士山・こふじさん）456.0 m（豊後大野市）

◎四月二〇日（日）　屋山（ややま）（高田富士・たかだふじ）543.0 m（豊後高田市）尻付山（しりつきやま）（大岩屋富士・おおいわやふじ）587.4 m（豊後高田市）

由布山麓の山桜

お知らせ

五月月例山行のご案内

・月　日…五月二七（日）
・目的地…由布岳
（豊後富士、別府市・由布市）（1584.0m）
・出　発…午前六時サニー出発
・支部定例総会に出席された方は、総会資料の日程と変わっていますのでご注意を。

六月月例山行のご案内

・月　日…六月一七日（日）
・目的地…涌蓋山
（玖珠富士、九重町）（1500.0m）
・出　発…六月一七日午前六時サニー出発

七月月例山行のご案内

・月　日…七月八日（日）
・目的地…琴路岳
（能古見富士、佐賀県鹿島市）（501.2m）
・出発…七月八日午前五時サニー出発
・参加者同士の相談により、前日出て、近くの山に登ることも考えられます。

事務局よりお知らせ

一・会費納入の件

支部費（一年間一，〇〇〇円）未納の方は同封の振り込み用紙により、振り込んで下さい。会友の方で支部費三年間未納の方は大至急入金して下さい。六月末までに入金または連絡がない場合は、退会扱いとなります。

二・中央分水嶺報告書

『中央分水嶺踏査報告書』購入の連絡を頂いた方で、まだ購入されてない方は至急事務局へおいで下さい。（一，二〇〇円です）・

三・本部総会

本部総会、五月一九日（土）できるだけ参加方しましょう。

四・全国支部集会

今年の全国支部集会は一〇月です。
場所：岩手支部（参加費一六，〇〇〇円）
参加申し込み：七月三一日まで（早めに事務局までご

連絡下さい）

五・名簿の訂正

支部総会へ出席された方へ当日お渡しした会員名簿の会員番号空白欄にご記入下さい

佐藤壮吾（04.06）加入
田所歳朗（04.07）
後藤　実（05.04）
14168　久保洋一（05.06）
14148　立石斎二（05.05）
14200　佐藤善則（05.09）
14327　加藤平治（06.09）

六・入会申込書提出

会員名簿整理のために、入会申込書の再提出をお願いしていますが、まだ未提出の方は、至急提出して下さい。ようしのない方は事務局まで。

七・所属グループとの交流

会員で山のグループを主宰または加入されている方は、年に一度は会員を誘って支部山行にご参加下さい。

お断り

前回の「会員の所属するクラブ紹介コーナーNO2」「大分山の会」の欄の中で、原稿に会のシンボル・マークが紹介されていましたが、編集の過程で落としていました。お断りしてこの場で紹介します。

大分山の会マーク

後記

○　三月一日エノハ解禁。独り河内川上流へ入る。数匹バラし、三キープ。一六センチ以下は放流。

○　あがるとゴム長を履いている若者二人の姿。近づいて「あんたたちが先行するから釣れん」と言ったら、カエルの調査のために、熊本から来ました」と言う。??快く分かれた??

○　翌日、朝日新聞の◇◇欄を読む。カエルが△△病にかかって、世界的に激減とのこと。『生態系に重大な問題』とある。納得。

（安部）

○　自然は人間の師であるととある本に書かれていた。登山というスポーツを通して自然と触れ合うときに、その　優しさや暖かさを感じる。

○　植林や林道、砂防ダムなどを目のあたりにする時、毎年のように破壊される林道と、何十年も変わらずに人々を運ぶ林道の違いに気付く。

○　急傾斜地での植林事業がその元凶のような気がするのは私だけであろうか？

○　せめて植林に適した地形だけで、植林をして欲しいものだ。傾山、祖母山系、九酔峡など自然林保護区にして

○　四季の花々や秋の紅葉、新緑の山並みを、人々にそして観光客に見せて欲しいと思う今日この頃である。

（中野）

○　一年の内にほんの十数日しかその存在を主張しない山桜。日頃はそこにあることすら気づかせない奥ゆかしさ・・・。

○　今年も三月末から四月始めにかけてやっぱりその姿を見せてくれました。

○　鶴見岳北の稜線から見た由布岳。山麓のいたるところにちりばめたように咲いた山桜の木々が、まるでしとやかな着物の裾模様を連想させ、ひときわ艶やかな由布の山姿に見えました。

○　山桜と言えば・・・・「敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜花」・・・。この歌を詠んだ本居宣長の心を曲げて、「潔さ」として大和　心や大和魂が、敷島隊・大和　隊・朝日隊・山桜隊などの特攻　隊の名前に使われた歴史もある・・・。

○　唐国のもののしるしのくさぐさを　大和心にともしとや見む—赤染衛門—。大和心も大和魂も、もともと平安期の女性が使いだした言葉だったのだ・・・。などということを景色を見ながら思い起こしたり・・・。

（K・I）

ここは何処？

・　**この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？**

・　お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。（二名までで、正解多数の場合は抽選します。）

・　締め切り六月三〇日

前回の正解は西穂高から見た焼岳でした。

日本山岳会東九州支部報　第３７号

２００７年（平成１９年）４月２５日（水）
発行者　梅　木　秀　徳
編集者　飯　田　勝　之
発行所　〒870-0021
大分市府内町１－３－１６
サニースポーツ内　西　孝子方
TEL･FAX　097-532-0926
題字　（故）佐藤正八